

カリタス女子中学校 第一回入学試験

二〇二二年二月一日（午前）実施

国語問題

（五〇分）

*答えはすべて解答用紙に記入すること。

*字数の指定がある場合は、句読点や記号をふくむこととします。

一 次の①～③の——部の漢字をひらがなに改め、④～⑦の——部のひらがなを漢字に改めなさい。ただし、④～⑦で送りがなを必要とするものについては、送りがなも書くこと。

- ① 的を射た言葉
- ② 車窓からの景色
- ③ 養蚕がさかんな地域
- ④ 答案用紙をうら返す
- ⑤ 要求をしりぞける
- ⑥ 魚のけいとう分類
- ⑦ じよやの鐘

次の文章を読み、後の問いに答えなさい。※のついた言葉には、文章の最後に注をつけてあります。

みなさんはテレビやラジオなどでまったく知らない言語を聞いた時、それがどのように区切れるのか、どこからどこまでが一つの単語なのか、なかなかわからないと思います。赤ちゃんはそれと同じ状況じょうきょうにいます。いや、実はもつと難しい状況じょうきょうにいるといった方がよいかもしれません。赤ちゃんはどのように単語を見つけていくのでしょうか。単語を見つけるためには、その前に何を学習しなければならぬのでしょうか。

〈 中 略 〉

例えば「ココデハキモノヲヌイデクダサイ」と書かれたサインを見たときとします。すると、一瞬いっしゆん「ココデハ キモノヲ ヌイデクダサイ」と区切ってしまうたくなりませんか？ でもそれが温泉の脱衣場だついじやうならよいけど、料亭りやうていの玄関げんかんだったら、あれ、おかしい、キモノを脱ぬぐなんてヘンだな、と思いますよね。それで少し考えると、ああ、「キモノ」ではなく「ハキモノ」だ、とわかるわけです。でも、それはみなさんが「ココ」「ハキモノ」「キモノ」「ヌグ」ということを全部知っていて、単語のそれぞれの意味もわかっているからです。「単語」だけでなく、「デ」とか「ヲ」とかいう助詞もすでに知っています。さらに、

A

このように、言語に習熟している人なら、書いてある文章を見たら（あるいは聞いたら）何も考えずに自然に単語に区切っていく、単語の意味を記憶きおくから取り出して、文章全体の意味を理解することができます。さらに、自分の持っているものごとやできごとに関するいろいろな知識ちしき（常識）も使って理解を補強きゆうきやうしています。常識から考えて文全体の意味がヘンだったら、もう一度考え直して単語の区切り方を修正することもできるのです。でもこれはみなさんが単語の音の形かたち（つまり、この音のかたまりが一つの単語であるということ）とその音のかたまりに付随きよぞうしている意味を知っていて、世の中のことに關しているいろいろな知識も持っているからできることなのです。

赤ちゃんの場合とはというと、もちろん **B** このような「高級なこと」はできません。単語の意味はわかりませんが、そもそも音を理解するためには、聞こえてくる音声を単語に区切っていかなければならないということさえ最初は知らないのです。では、赤ちゃんはいろいろから、どうやって単語を見つけ出すことができるようになるのでしょうか。

人の声はリズムを持っています。あるところは強く、高く、あるところは弱く、低く言います。

1

、あるところははっきり発音し、

あるところはまとめて素早く言います。このような強弱、緩急のリズムやイントネーションは、多くの場合、文の区切りと呼応しています。「ココデハキモノヲヌイデクダサイ」も、カタカナだけで書かれたものを読む時には間違ってしまうかもしれませんが、声に出した時「ココデハ キモノヲ」と「ココデ ハキモノヲ」では、聞こえてくる音のリズム、イントネーションが違います。ですから、話し手が自然に発話した時は、聞く方も誤解しません。つまり、リズムやイントネーションは、聞こえてくる音声を区切っていくのにとってもよい手がかりになっています。

赤ちゃんがお母さんのおなかの中で学んでいる言語(母語)のリズムとイントネーションのパターンは、生まれた後に人の声を単語に区切っていくための、非常に大事な最初の手がかりです。

2 「単語」というのは「イヌ」とか「行く」などの、「それ自体で意味を持つことば」です。一方、「は」「を」「て」とか、英語なら「the」などのことばは、それ自身では独立した意味を持ちません。これらを「機能語」(あるいは「付属語」と呼びます。

単語と機能語が音の特徴としてどのように違うか、ちょっと考えてみてください。まず機能語は、ほとんどの単語より短いですね。日本語の場合、「手」「目」「血」などは一音節ですが、ほとんどの単語は二音節以上です。かたや助詞「は」「が」「を」「と」「に」「で」などは多くが一音節です。これらの一音節の「音」は非常に頻繁に現れます。しかも日本語の場合には、その目立たない一音節の「音」がリズムのまとまりの終わりにくることが多い。

赤ちゃんは耳に入ってくる音の **C** そういった特徴に気づきます。そして非常に早い時期からこの情報を使って単語と機能語を区別できることがわかっていきます。また、機能語どうしが続けて使われることはあまりなく(例えば「ワタシ ガ ニ」ということはありませんよね)、単語と単語の間に挟まれて使われます。ということは、頻繁に現れる機能語に気がつけば、単語を見つけたとしてもよい手がかりになります。赤ちゃんは実際にこの手がかりを単語を区切っていくのに使っていることもわかっています。

余談ですが、お母さんは子どもに対してよく「手」「目」ではなく「おてて」「おめめ」などと言いますが、これは **D** 理にかなったことです。「おてて」「おめめ」ということで、単語を一音節で言うのを避けることができ、子どもが「手」「目」を機能語だと間違えないように助けるのです。でも「血」は「おちち」とは言いません。これは別に「チチ(乳)」ということがあるということに関係するのかもしれませんが、私にはほんとうのところはわかりません。いずれにせよ、「血」の場合は、「アラチガデルワネ」のように子どもに対しても「チ」

と言うしかありません。

二歳さいぐらいの小さい子どもはよく「血が出た」と言いたいところを「チガ・ガ・デタ」と言い間違いをします。つまり、「血」を「チ」ではなく、「チガ」と思ってしまったのです。これは、日本語を母語とする子どもが、「チ」は機能語ではなく単語であることはすでに知ってはいるものの、一音節のことは単語だと考えにくいので、「チガデテル」の「ガ」を「チ」の一部にしてしまい、「チガ」で一つの単語だと誤解してしまったせいなのだと考えられます。「蚊かに刺さされた」と言いたいところを「カニニササレタ」と間違ってしまうのもよく聞きます。特に、日本語の話しことばでは「ぼく行きたい」とか「アイス欲ほしい」のように助詞を省略して言わないこともあるので、「ガ」は助詞ではなく「チガ」という単語だと考えるのは、実は非常に合理的なことなのです。

このように、子どもの言い間違いの多くは、子どもが知らずにしている賢かしい分析ぶんせきを反映しているのです。

〈 中 略 〉

赤ちゃんは、ある音、あるいは音のかたまりがどのくらい頻繁に出てくるか検出できると述べましたね。**3** それだけではないのです。赤ちゃんは、ある音の次にどの音がいともくるか、あるいはたまにしかこないか、ということも検出できるのです。

お母さんが赤ちゃんに語りかける時、「ミルク」という単語をいろいろな文の中で使います。

4

「ミルクヲノム」「ミルクガホシイノ」

「スグミルクツクルネ」「タクサンミルクノンデネ」など。すると、「ミ・ル・ク」という三つの音のつながりはまとまりとしてとても高い確率で現れるのに比べ、その前後の音はけっこう変わるといことに気づくはずです。

この気づきは単語を見つげるのにとでも役に立ちます。※ violin のように、アクセントが語頭※にない単語を単語として切り出す時にも有効です。アクセントは頭ではなく真ん中にあるけれど、vioとinはいつもいっしょに現れるな、と気づくと、violinは vioとinという二つの単語ではなく一つの単語なのだ、と思うことができるわけです。

このようにして連続的な音声の中から切り出していった単語を赤ちゃんは記憶し、ストックしていくことができます。赤ちゃんは切り出した単語を数週間あとも覚えていて、新しく耳に入ってくる連続的な言語の音の中にその単語が出てくると、その単語を見つけ出すことができることがわかっています。

生後九か月、一〇か月くらいになると、(多くの単語の意味はまだ知らず、音のかたまりとしてですが)ストックされた単語もずいぶん増えているはずです。すると赤ちゃんは、耳から入ってくる言語の音の中に、ずいぶん前に切り出した「知っている」単語を見つけこ

とができるようになります。そうすると、知っている単語がまったくない時に比べて、聞こえてくる人の声を単語に区切る作業がずいぶん楽になります。「カワイイアカチャン」という音を聞いた時、「アカチャン」が一つの単語だ、と知っていれば、「カワイイアカチャン」と区切ることはしなくなりつまずき、ストックにある単語は、新しい単語を見つけていく際に大きな助けになるのです。

単語のストックが増えてくると、ストックした単語の持つ音のパターンの分布をさらに分析します。例えば英語では「ɪ」という音は単語の終わりに現れません。また、sing とか going の終わりの「ɪ」という音は単語のはじめに来ることはなく、終わりに現れる傾向が強いのです。赤ちゃんは音素の現れる位置の関係にも気づき、それを単語を切り出していく手がかりとして使えるようになります。こうした手がかりを使えるようになると、例えば violin のようにアクセントが後にくる単語を見つける時にも役に立ちます。

このように、赤ちゃんは聞こえてくる言語をただぼんやりと聞いているわけではなく、無意識のうちに鋭い分析をしているのです。赤ちゃんは大人のように「高級なこと」はできないと前に述べました。でも音のつらなりを区切って単語を見つけ、それを記憶にストックしていく赤ちゃん、^F 実はとてもすごいことをしているのです。

〈今井むつみ『ことばの発達の謎を解く』(ちくまプリマー新書)より〉

〔語注〕

※付随……………あるおもな物事とつながっていること。

※緩急……………遅いことと速いこと。

※イントネーション……………言葉の話すときの、声の上がり下がり。

※“a”“the”……………どちらも名詞の前に付く言葉。

※一音節……………「音節」が一つであること。「音節」とは音声上の一単位、一まとまりの音のくぎり。

※violin……………「バイオリン」という意味を持つ英単語。

※アクセント……………一つの語のうち、ある部分を強く、または高く発音すること。

(例 「橋」と、ご飯を食べる「はし」とでは、強く発音する部分が異なる。)

※[h]……………音を示す記号。日本語の「ハ」の発音に近い。

- ※ sing ……………「歌う」などの意味を持つ英単語。
- ※ going ……………「出発」などの意味を持つ英単語。
- ※ [ɪ] ……………音を示す記号。日本語の「ン」の発音に近い。
- ※ 音素……………言葉の音の最小単位。その区切りは言語によって異なる。

問一

1 4 に入ることはとしてふさわしいものを、次のア～オの中からそれぞれ一つずつ選び、記号で答えなさい。ただし、同じ記号は一度ずつしか用いないこととします。

- ア したがって
- イ 例えば
- ウ でも
- エ また
- オ ところで

問二

A に入る文としてもっともふさわしいものを、次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 銭湯ではキモノは必要ないけれど、料亭ではキモノが必要だ
- イ ハキモノは全員履はいているが、キモノは全員が着ているわけではない
- ウ 銭湯ならキモノを脱ぬぐけれど、料亭ではキモノは脱ぬがない
- エ ハキモノとキモノはカタカナで表記されると見分けがつきにくい
- オ 料亭の玄関でも銭湯の脱衣場だついじょうでも、ハキモノを脱ぬがなければならぬ

問三

B このような「高級なこと」とありますが、これについて次の(1)(2)に答えなさい。

- (1) 「高級なこと」とはどのようなことですか。これを説明した次の文章の ①・② に当てはまることばを、本文中からそれぞれ指定された字数でぬき出し、はじめの六字を書きなさい。

ここでの「高級なこと」とは、「自然に単語に区切り、①(二十六字)し、所持するさまざまな知識によって理解を補強し、文全体の意味が通らない場合には、常識に照らして②(十字)できること」を指す。

問六

E 「蚊に刺された」と言いたいところを「カニニササレタ」と間違ってしまうとありますが、なぜ子どもはこのように言い間違えてしまうのですか。「チガガデタ」の筆者の説明にならって、その理由をわかりやすく説明しなさい。

問七

F 実とはとてもすごいことをしているのです。とありますが、本文全体を通じて筆者が述べている「とてもすごいこと」として、もつともふさわしいものを次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

A 赤ちゃんは聞こえてくる音をほんやりと聞きながら単語のストックを増やし、そのストックが増えるにつれて少しずつ意識的に音のパターンの分析を行うといったように、言葉や文への理解を深めていること。

I 赤ちゃんは「ミ・ル・ク」という三つの音が、多くの文の中で共通して出てくることからつなかりに気づくなど、連続的な音声の中から切り出してストックした単語を、大人になるまでずっと記憶していること。

U お母さんが子どもに対して「手」「目」ではなく「おてて」「おめめ」と言うのは、単語を一音節で言うのを避けるためであり、子どもはそのことを理解し、自分自身で一音節の単語に戻すことができること。

E 赤ちゃんは単語の終わりに現れない「E」という音素や、単語のはじめに来ることがないsing・goingの終わりの「E」といった音素の存在に気づき、その知識を有効に活用して発声に生かしていくことができること。

オ ストックしている単語が増えていくと、赤ちゃんは耳から入ってくる言語の音の中に、ずいぶん前に切り出した「知っている」単語を見つけ、新しい単語を見つけていく際の大きな助けとしているということ。

次の文章を読み、後の問いに答えなさい。※のついた言葉には、文章の最後に注をつけてあります。

小学校五年生の「千春」はふとしたことがきっかけで、修理屋の「おじさん」に出会う。エンジンアで発明家の「おじさん」の仕事を手伝ううちに、「おじさん」といろいろな話をするようになる。また、「千春」のクラスメイトである「俊太」もおじさんの店によく通っている。

毎年十月のなかばに、小学校の運動会がある。

千春はもともと運動が大の得意というわけではないけれど、ものすごく苦手でもない。ドッジボールではたいがい最後のほうまで生き残れるし、五十メートル走のタイムは女子の平均とほぼ同じだ。体育の授業も、好きでもきらいでもない。

でも、運動会は気が重い。

きっかけは、三年生のときのクラス対抗リレーだった。一年生から六年生まで、学年ごとに行われ、クラス全員が六、七人ずつのチームに分かれて出場する。

千春は最後から二番目の走者だった。バトンを受けとったときには一番先頭で、夢中で走りはじめた。がんばれ、がんばれ、とクラスメイトが声をかけてきた。トラックの外側にぐるりと設けられた観覧席に、他学年の子どもたちとたくさんのおとなたちが、ひしめいていた。

どうか、抜かされませんように。グラウンドに流れている勇ましい音楽と、わんわん響く声援に包まれて走りながら、千春はそれだけを念じていた。半分ほど走ったところで、肩越しに後ろを振り返った。二位の走者は、まだだいたい後ろにいた。どうか一位置のままアンカーにバトンを渡せそうだった。

そこで油断したのが、よくなかったのだろうか。

前にむきなおろうとして、足がもつれた。体が前のめりにかたむき、目の前にぐんぐん地面が近づいてくる。周囲の音が耳からすつと遠のいた。思わず目をつぶった次の瞬間に、手のひらとひざに鈍い衝撃が走った。

わあっというどよめきでわれに返り、千春はのろのろと立ちあがった。手に握りしめていたバトンがないことに気づき、途方に暮れて

まわりを見まわす。ほかのチームの走者がはちまきをなびかせて駆けてきて、立ちつくしている千春を次々に追いこしていった。

彼らの背中を追いかけて、千春は残りの半周をなんとか走りきった。バトンをアンカーに引き継いだ後、担任の先生に保健室まで連れていかれた。手足をひどくすりむいて、血が出ていたのだ。

傷口を消毒してもらっている最中に、涙がこぼれた。

「しみる？ ごめんね、少しだけがまんしてね」

優しく言われ、千春は手の甲で目もとをこすった。傷よりも、胸がひりひりと痛んだ。取り返しつかないことをしてしまった。

ばんそうこうを貼ってもらい、グラウンドに引き返したら、三年生のリレーはもう終わっていた。クラスの応援席にもどると、まさきに紗希から声をかけられた。

「千春、大丈夫？」

「うん、大丈夫」

千春がチームの子たちにあやまっているあいだも、**B** 紗希はとなりにいてくれた。

誰も意地悪なことは言わなかった。紗希だけでなく先生もそばに寄ってきて、見守ってくれていたおかげかもしれない。大きなばんそうこうが痛々しく見えたのかもしれないし、同じクラスのほかのチームが善戦して、全体としては一位になれたからかもしれない。

だけど千春は、今も忘れられない。千春の差し出したバトンを **C**、アンカーの男子の怒った顔を。ゴールのそばに一列になって座っていたみんなの、がっかりした顔も。

あれ以来、練習でバトンを手に持つだけで、じんわりといやな汗をかく。去年の本番では、走る順番が近づくにつれ、おなかがきりきりと痛くなってきた。勢いあまって転ぶのがこわくて全力で走れず、後ろのひとりに追い抜かされてしまった。びりになるよりはましだし、みんなに責められもしなかったけれど、本音のところはわからない。

〈 中 略 〉

「ねえ、おじさん」

言いかけて、千春は口ごもる。おじさんが笑った。

「なんだ？ 言いたいことがあるんだったら、はっきり言いな。おかゆのまわりをぐるぐる歩いてないで」

D おかゆのまわりを歩く、というのも、おじさんが好んで使う外国のことわざのひとつである。

熱々のおかゆを猫に出してやると、冷めて食べられる温度になるまで、お皿のまわりをぐるぐるまわって待っている。転じて、なにかやりたいことや言いたいことがあるにもかかわらず、行動を起ささない様子を意味するという。おじさんはわざわざミルクをつかまえて、実演してみせようとしたけれど、迷惑そうに逃げられてしまった。

「転ばない靴くつって、作れない？」

千春はおずおずと聞いてみた。おじさんにも、事情はすでに話してある。おれもリレーは好きじゃなかったな、と思いのほか共感してくれた。どうしてチームで競争させるんだらうな、ひとりのほうが気楽なのに、と。

「よし。じゃあ、いっしょに考えてみるか」

おじさんが作業台のひきだしからノートを出した。

発明のアイディアを練るときや、実験の手順を考えると、おじさんはこのノートを広げて、思いついたことをどんどん書きつらねていく。どんなにささいなことでも、一応は書きとめておくのがコツらしい。

〈 中 略 〉

「なにやってんの？」

背後から声をかけられたのは、そのときだった。

千春もおじさんも、話に熱中するあまり、引き戸の開く音が耳に入っていなかったようだ。

「あ、新しい発明？」

作業台にすたすたと近づいてきた俊太が、千春の肩越しにひょいとノートをのぞきこんだ。

「アンテイセイ？ ってなに？」

「なんでもない」

千春はとっさにノートを閉じた。俊太が不満そうに口をとがらせる。

「なんだよ。見せるよ」

千春も仲間はずれにするつもりはないけれど、この発明は俊太には必要ない。なにしろ、俊太はクラスで一番足が速いのだ。^{*} 田中先生

だって、みんなも和田のフォームを見習えよ、とほめていた。

「靴を作ろうと思ってるんだよ」

とりなすように、おじさんが口をはさんだ。

正直に話すことないのに。ちょっと恨めしく思いつつも、千春は観念した。かくそうとしても、どうせ俊太はしつこく問いただしてくるにちがいない。

「靴って？」

「転ばないで、速く走れる靴」

「長谷川が？」

俊太は不思議そうにまばたきをしてから、あ、と声を上げた。

「もしかして、運動会のため？ 気合い入ってるんだな。なんか意外」
にやにやと笑っている。

「別にそういうんじゃないけど。みんなに迷惑かけたくないだけ」

千春が言うと、俊太は 1 した。

「迷惑って？」

「リレーで転んだら、チームの足をひっぱっちゃうでしょ」

「なんだ、そんなこと心配してんの？ 誰でも転ぶときは転ぶんだし、しょうがなくなる？ ていうか、そんなの別に誰も気にしないって」

「わたしが気になるの！」

千春が 2 なって言い返した。

俊太はなんにもわかってない。自分は足が速いから、そうでない人間の気持ち想像できないのだ。昼休みにも、田中先生のもとで特別に訓している千春たちを尻目に、のんきにサッカーボールをけて遊んでいる。

「なに、むきになってんの？」

俊太は俊太で、3 したように言い返してくる。

「おい、やめろ」

いつになくまじめな顔で、おじさんが俊太をたしなめた。

「お前にとってはたいしたことじゃなくても、本人は真剣しんけんに悩なやんでるんだから」

「なんだよ、おじさんまで」

俊太はくちびるをかんだ。おじさんが千春の味方をしたのが、おもしろくないのだろう。ふたりで協力して新発明に取り組もうとしていたのも、のけ者にされたようで悔くやしいのかもしれない。

「そんなに心配なんだったら、うじうじ悩んでないで練習すれば？」

感じの悪い捨てぜりふに、千春は返事をする気にもなれなかった。やっぱり、俊太はなんにもわかっていない。練習さえしておけば、本番で絶対に失敗しなくてすむのなら、千春だってそうする。それだけでは安心できないから、こうしておじさんの知恵ちえも借りて、なんとかしようとしているのだ。

「だいたいさあ、特別な靴をはいて走るなんて、ズルじゃないの？」

ズルじゃない。

「ズルじゃない」

千春よりも一瞬早く、おじさんが 4 答えた。

「自分の頭で考えて、ベストを尽くそうとしてるんだ。ズルじゃない」

俊太はふくれつつらをして、無言でお店から駆け出していった。

運動会の前日も、千春はおじさんの店に寄った。

「いよいよ明日か」

おじさんは言った。

「本当にいいのか？」

結局、千春はふだんの靴で運動会にのぞむことにしたのだった。

冷静に考え直してみたら、俊太の言い分にも一理ある。千春にズルをするつもりはなくても、変わった靴をはいて走ったら、俊太が言っていたように「ズル」だと考える子もいるかもしれない。

「うん。ちょっとはましになったし」

毎日のようにバトンにぎを握にぎっていて、さすがに体も慣れたのか、トラックに立ったときの緊張きんちやうもいくらかうすれてきた気がする。

「特訓の成果かもな。おつかれさん」

〈 中 略 〉

「ひさしぶりだな」

店に入ってきたのは、俊太だった。口をへの字に引き結び、ずんずんとふたりに近づいてくる。

ここで会うのは、靴のことで言い争いになって以来だから、千春にとってもひさしぶりだった。教室で見かけても、目は合わせない。口もきいていない。これまでも、とりたてて親しく話をするわけではなかったから、変わらないといえは変わらないが、避さけている感覚も、避けられている気配もあった。

その場から動けずにいる千春の前で、俊太は立ちどまった。手に持っていた紙袋かみぶくろを、千春の鼻先つに突きつける。

「これ」

「なあに？」

面食らいながら、千春は両手で袋を受けとった。そんなに重くない。

「明日、使えば？」

おそるおそる、中をのぞいてみる。運動靴が一足入っていた。

翌日は、みごとな秋晴れだった。

運動会は、午前の部と午後の部に分かれている。五年生のリレーは、午前の部の最後のほうに行われた。

千春は転ばなかった。転ばなかったばかりか、すぐ前を走っていた、ほかのクラスの女子との距離きよりを、ほんのわずかながら縮めもした。

「よくやったな、長谷川」

次の走者にバトンを渡し、ほっと胸をなでおろしていたら、田中先生にも声をかけられた。浅く頭を下げた拍子に、足もとに視線が落ちた。

はいているのはもちろん、俊太に貸してもらった運動靴だ。

トレーニングシューズ、というものらしい。サッカークラブで練習のときにはいているという。サッカーをやっている子たちのあいだでは、トレシュー、と略して呼んでいるそう。底には、試合のときにはくスパイクに似た、いぼいぼの小さな突起がついている。ただしゴム製で、スパイクほどは硬くないので、足にあまり負担がかからない。いわば、本式のスパイクと一般的な運動靴の中間のようなものだ。「こけたくないんだったら、トレシューがいいかと思って」

昨日、俊太は **G** ぼそぼそと言っていた。

「ふつうのスニーカーより、すべりにくいから。おれ、二足持ってるし」

「ありがとう」

千春がお礼を言うと、いや、まあ、別に、と **H** もぞもぞしていた。

黄色いトレシューは、かなりはきこまれている。あちこち泥がはね、全体的にうつすらと黒ずんで、どちらかといえば黄土色に近い。念のため、いったん家に帰った後で、近所を軽く走ってもみた。借りものとは思えないほど足にしっくりとなじみ、靴ずれもなかった。

トレシューのおかげで無事に出番が終わってからは、千春もクラスのみんなにまじって、トラックの内側から声援を送った。

〈瀧羽麻子『たまねぎとはちみつ』（偕成社）より〉

〔語注〕

※紗希……………「千春」のクラスメイト。

※ミルク……………「おじさん」の店に出入りしている猫の名前。

※田中先生……………「千春」の担任の先生。高校時代、短距離走の選手として活躍していたため、クラスでも熱心に指導をしている。

問一

A 周囲の音が耳からすつと遠のいた。とありますが、これについて次の(1)(2)に答えなさい。

(1) 「周囲の音」とは、どのような音ですか。本文中からぬき出し、はじめと終わりの五字を書きなさい。

(2) 「周囲の音が耳からすつと遠のいた」とは、千春のどのような心の状態を表していますか。もつともふさわしいものを次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 油断してしまったことを後悔こうかいしている

イ 何が起こったのかわからず動転どうてんしている

ウ 転んでしまったことにあせりを感じている

エ 非難らいくたんや落胆らくたんの声に耳をふさぎたくなっている

オ 取り返しのつかないことをしたと困惑こんわくしている

問二

B 紗希はとなりにいてくれた。とありますが、この時の「紗希」の気持ちを簡潔に説明しなさい。

問三

C に入る言葉としてもつともふさわしいものを、次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 受けとろうとしなかった

イ 心配そうに取りに来た

ウ 得意げに受けとった

エ しぶしぶ受け渡した

オ 乱暴にひったくった

問四

D おかゆのまわりを歩く ということわざを次の【例】の表のようにまとめました。
 このように、ことわざには「たとえ」を使った表現がたくさんあります。後の
 表のように「たとえ」と「意味」を書き分けなさい。



の中で好きなことわざを一つ選び、

【例】

ことわざ	意味
おかゆのまわりを歩く	なにかやりたいことや言いたいことがあるにもかかわらず、行動を起こさない様子
たとえ	熱々のおかゆを猫に出してやると、冷めて食べられる温度になるまでお皿のまわりをぐるぐるまわって待っている。

雨後のたけのこ 風前のともしび 渡りに船 青菜に塩 河童の川流れ

問五

1 ~ 4 に入れるのにふさわしい語句を次のア~キの中からそれぞれ一つずつ選び、記号で答えなさい。ただし、同じ記号は一度ずつしか用いないこととします。

- ア ゆっくりと イ ぼつねんと ウ むっと エ きっばりと オ かつと カ ほっと キ きよとんと

